

「國家の乏しきと云う者は、金銀の通利の快きに、布粟をつむの人なければなり」
(梅園、『俣原』)

この20数年、グローバリズムの進展のなかで人が確認させられてきたのは、勝者が金融上の投機家に魅力的な高収益を叩き出すグローバル企業であり、敗者が各国の労働者や環境であったということでしょう。そして、勝者のグローバル企業でさえ、高収益を維持するために成長を強制され、敗者が常によりいっそうの打撃を受け続けているのもまた事実です。そこに現在の金融システムのあり方そのものが問題であると感じとる人も増えてきました。世界各地での地域通貨の取り組みがその兆候でもありましょうし、そこにはかつてあった、シルビオ・ゲゼルやフレデリック・ソディ、C・H・ダグラスなどの貨幣改革論のさまざまな議論が復活しているのを見ることができるからです。

多くの貨幣改革論者に共通する視点はシンプルにみえます。貨幣は富ではなく、富に対する請求権であり（F・ソディのエルゴゾフィーではエネルギーに対する請求権）、実質的な価値すなわち実質的な富からなる事物と引き換えに人が受け入れるものにすぎないと。つまり、彼らは「貨幣を財とみる支配的な考え方を放棄してきた」わけです。そのことによって実体経済と貨幣経済を対照させる姿勢を強調し、実質的な財の循環を媒介し処理する情報システムにすぎない貨幣システムが実質的な富の配分を決定し、人が労働に従事する工場やその製品、農場、商店、輸送システム、通信システム、病院、学校などなどからなる私たちを支える財やサービスを生み出す生産システムを規定している事実注目してきました。自然な経済システム、あるいは富を作り出す実体経済のなかで富がどう配分され、誰がどのような利益を上げるのかを決定し、それを維持する仕組みとして貨幣経済を見てきたわけです。経済の物質循環はほとんどすべてとってよいほど（国際貿易におけるバーター決済などの例外はあるにしても）貨幣の反対方向への循環によって決定されています。しかし健全な経済にあっては貨幣システムが必ず経済の支配的な要因であり、交換が基づくべき基準や支配的なメディアである必要はありません。このことは、逆説的に金融システムによる貨幣創造とその莫大なボリュームが実体経済から遊離している現実を見ればあきらかでしょう。ベルナール・リエターが指摘するように世界中の外国為替取引の97.5%が実体経済と関わりをもつ取引ではなく純粹に金融上の取引となっています。

こうした経済は病んでいるとしかいいようがありません。金融資産とその取引が実質的な経済活動による産出の増加率を遙かに上回るスピードで膨張しているわけですから。そしてそれが実体経済に多大の影響を、瞬時に与えるという事例は幾度も繰り返されている通貨危機にみとることができます。どこの国でも勤労階級の賃金は下落し、貨幣システムからもたらされる収益はエスカレートしてきています。経済活動の果実は金融をハン

ドリリングする者たちにもたらされています。たとえば米国では、7つの巨大金融機関の株主たちは平均的な投資の収益率で44%の数字を実現していますし、これを24の金融機関に広げてみても38.4%といわれています。今日金融システムはグローバル・メッシュといわれるようなコンピュータシステムによってリンクされていますから、金融取引はネットを利用した抽象的な数字の移転、振替でほとんどが処理されています。金融のトレーダーはマーケットで多数の人間が予測する予測に与して、「美人投票」(ケインズ)のなか、収益を上げるようにコンピュータ・スクリーンをにらみながら行動しているわけです。それがそうした世界だけのカジノ資本主義を形作っているだけなら問題は少ないのかもしれませんが、しかし、カネの動きが経済に対して主導的な役割を演じているのです。金融上のバブルが膨らみ、破裂するシーンは現に体験してきたところです。

マーケットに燃料が注ぎ込まれるかのようにカネが注ぎ込まれ、時に引き上げられという現実を根底で制約している事情は現行の金融システムにあるようです。そこでは貨幣はその大部分がベースマネーを元に創造される信用マネーとして、利子コストの発生する貨幣として存在しています。こうした利子コストの発生する貨幣は国民経済やその公的部門の債務過多を通して経済に重荷を発生させ資本コストをカバーしうる収益の実現を求めて成長へと経済をドライブさせ、人間と環境に負荷をかけると同時に、国際的には銀行間再預金やデリバティブズのような金融エンジニアリングを通して莫大な資金ポジションを造成させ、生産的投資に向けられない金融上の投機に拍車をかける結果になっています。いま、そうした金融資本主義に翻弄されない経済社会をどのように作るのかが問題として意識されてきているといえるでしょう。

こうした状況のなか改めて確認されるべきは、「貨幣理論に対するエントロピー法則の意義と適用という物理科学から流出してきた見解」でしょう。「もし、古典派や新古典派が推論するように、貨幣が財であるかのように扱われうるならば、それはまた、物理的世界を苦しめているのと同じ自然の帰結に苦しまないということがあるのか、ということでもある。時の経過のなかで減価を被る物理的財と異なって、貨幣債務は複利で増大していくし、だからエントロピー法則の影響から逃れているようにみえる。こうした貨幣と物理的財の非対称性のゆえに引き起こされる周期的な再調整あるいは金融危機を防止するために、シルビオ・ゲゼルやフレデリック・ソディのような19世紀後半から20世紀初めの異端的思想家は、こうした不均衡が流動資産の保有に対する課税によってのみ除去されると考えた。まったくといってよいほど知られてはいないが、こうした異端的思想は資本主義の診断において思想の重要な底流としてケインズによって『一般理論』で認識されている。」

(1)

今日、持続可能な経済社会を願う人たちにとって共通する問題意識をあげれば下記のようになるでしょう。

* 金融上の投機を割の合わないものにする。

- * 金融システムによる無からの貨幣創造、金融バブルの増大を制限する。
- * 住民やコミュニティの間で、競争至上主義によって破壊された協同的な行動へのインセンティブを作り出す。
- * 地域に根を張った長期の、実質資産に対する投資のインセンティブを作り出す。
- * 人間関係やコミュニティの社会的紐帯を強化する。

こうした要求の背景には、グローバルな成長や競争の増大を望まず、むしろコミュニティの成員に環境と調和しながら、経済生活上の安全を提供し、地域社会への生産的な貢献に公正な報酬を提供する健全で豊かな社会が建設されるべきであるとの観念が存在しています。それは次第により多くの人の共有し、支持するところとなっているようにみえます。金融上の投機家や企業によっては不都合であるかもしれないが、人間社会が持続可能であることを願うとすれば当然の要求といえましょう。それを示しているのが、近年の地域通貨の取り組みや更新可能なエネルギーへの取り組みなどです。

近年、各地の地域通貨の実践が人々の意識に持ち来しているものはかなり意義あるものに見えます。そこにはかつてあった異端的示唆の再生すら見受けられます。列挙すればこうなるでしょう。

- * 地域通貨の発展強化 独自の通貨を使用することで交換をなす成員間で共通の利益を確保する。
- * ゼロあるいはマイナス利子（より正確には Umlaufgebuehr 「循環促進税付き」の意）の通貨を導入する。 - - 富の格納手段として、貨幣には排他的な特権が成立している。実質資産には保有のコストが含まれるし、森林や工場、農地、建物、個人の技能などは維持コストがかかる。また自然な減価や文化的陳腐化の脅威にもさらされている。かつて貨幣であった黄金でさえ、保蔵コストなどが必要。今日の信用マネーはシステムが実現する抽象であることで、熱力学法則の影響から抜け出ており、その事実プレミアムが発生する社会的な関係を人は作り出しているが、そうした貨幣を自然のなかで成立するものへと変更しなければ、有限な孤立系のなかで成立する社会経済がもつべきエネルギーフローの情報処理システムとしての貨幣に真の場所はない。
- * 債務の制限。 現行の信用マネーのシステムでは、カネは金融システムを通じた資金の貸借から利子コストの発生するマネーとして作り出されている。当然、そのマネーは

利息を含めて返済されねばならず、また以前の借入が返済されるスピードよりも速く借入はふくらんでいく。それは経済危機が荒々しく事を解決するまで続き、社会経済の受ける打撃は甚大である。さらにこのシステムのもとで、資金を手当てしている公的部門は増え続ける債務に苦しむことになっている。漸次、利子の発生しない貨幣に債務を置き換えていくことなしには、国家債務の問題は解決されない。ゼロ利子債券や課税貨幣の手法が検討されるべきである。

- * 投機による利益には課税されるべきであり、社会的に再配分されるべきだ。貯蓄が、投機ではなく、長期の環境をも配慮した投資に向けられていくような社会経済的枠組みを作り出す必要がある。

利息はいうまでもなく、利益の利に息というように、まるで息をするかのごとく一定のペースで利をもたらすという意味です。しかしこの利息が経済に与える負荷を考えると同時に、それを成立させている人の時間の観念を展回する取り組みが必要でしょう。フレデリック・ソディは時間 t が直線的に推移する金融取引が实体经济に依存せず、それから乖離していく事実を経済危機の根底にみたのですが、そこでは金融上の契約が直線的に時間が経過するものとの前提にたつ時間観念に依拠しています。

社会経済はいうまでもなく運動 (mouvement) の相のもとにあります。かつて A.A. クールノーは運動論 (cine'matique) と名付けた研究のなかで「・・・直線的運動と循環的運動は運動の幾何学の諸要素である。両者は持続的 (continuus) であるか、周期的 (alternatifs) でありうる、すなわち同一の意味において一貫して支配されるか、ある意味と別の意味において交互に (alternativement) 支配されるかという。そこで、四種の要素的運動の区別があることになる。直線的 持続的 (rectiligne-continu)、直線的 周期的 (rectiligne-alternatif)、循環的 持続的 (circulaire-continu)、循環的 周期的 (circulaire-alternatif) である。これらは人間の勤労が目標とする目的にしたがって、単純なメカニズムも複雑なメカニズムも動かし、変容する機能を果たしている。こうした一次的分類が産業的運動の基礎である。」(2) と述べています。

しかし、私たちは貨幣や金融の関係を結び結ぶにつき、直線的な時間観念に基づいて契約を取り結んでいます。それも時間の経過のなかで周期的に意味内容を変える直線的 - 周期的な運動に身を置くどころか、直線的に、かつ中身に変更がない直線的 - 持続的な運動に身を置いています。しかし自然な生産を見てみると、かつて日本近世において通常であった (たとえば二宮尊徳の一円相 (3)) 循環する時間、それは始まりがあり終わりがある円環にて示されますが、そこに多様な視点が組み込まれ、配当された時間の経過のなかで周期的に意味内容を変える循環する時間の観念が存在しました。今日貨幣改革を考えるにつき、マイナス利子の課税貨幣 (消滅貨幣) を取り上げてみると、そこに貨幣が循環的 - 周期的に運動する事例をみることができます。コミュニティが一定の金融資産を担保に

一年間で循環を終える消滅貨幣を発行し、公共事業に支出される。それが循環しながら貨幣そのものにかげられた循環促進税によって保蔵手段としての機能を欠いた交換手段として取引を仲介しつつ、年の終わりに持ち越し費用として負担された税の総額によって自己自身を清算し、消滅する。こうした貨幣が循環することで地域経済に独自の資源の循環が保証されるわけです。

また、ゼロ利子の、貨幣需要に貨幣供給が自動的に対応するタイプの地域通貨のシステムは循環的・持続的なかたちで成立し、貨幣システムが貨幣保有者に与えている専権性を克服する可能性を秘めているといえるでしょう。いずれであっても、物質循環によって成立する経済社会の多様な情報処理システムが地域通貨というかたちで導入されることで、地域社会には己を多様に、また多元的に、多中心的に構成する可能性が与えられるでしょう。そのもっとも基礎的な効果は実際に取り組み始められた地域通貨にみとることができると思います。

地域通貨はなによりもまず、貨幣の人格化と個人の多重帰属の条件を作り出しています。ここでは多目的性を帯びた多価的労働 (travail polyvalent) と多様な評価価値が出現します。

よく地域通貨はそれに参加する個人をエンパワーメントするといわれます。たしかに、通常の通貨を介した市場的な取引に乗らないような個人の能力を引き出すことができます。しかし、その意味するところが問題でしょう。今日、国民通貨を介して取り結ばれる経済関係のなかでも、人の能力の発揮、すなわち労働は、多目的性を帯びた、多価的な労働への傾向を、とりわけ IT 産業などでは強めています。それは一部の人間に過重な労働を強いる反面、多数の失業者を生むことにもなっています。地域通貨が作り上げるような社会経済関係のなかにおかれて初めて、どのような参加者にとっても、己が労働の多価性が実現されます。それは多価的な性格を帯びる労働が他方で多くの成員による多様な評価 (評価価値 valeur d'opinion [ブルードン]) と対をなす関係を欠くと、通常通貨による均質化的評価の対象となり、その労働の多様性を喪失せざるをえないからです。

地域通貨は根底で普遍的、均質化的な運動と対重をなす観念を経済社会にもたらしています。それは単に経済関係にとどまらず、諸地域からなるより広域的な地域、それらの集合としてとらえ返される国際関係にまで新たな光をあてる trans-national な視点を提供していくことでしょう。

(1) マリオ・セッカレッチア、森野栄一訳、「貨幣、信用、金融、歴史的概観」、『自由経済研究』第 19 号、pp.62-63.

(2) A.A.Cournot, OEuvres Completes, TomIII, pp.38-39.

(3) 二宮尊徳の一元相の、基本的な図の一つ、天生草木華実輪廻之図にはこういう文言がある。「天命これを種といひ、種に率ふを草木といひ、その体茂れば華と名け、その気凝まれば実と名く」。